

岩手日報

2021年(令和3年)10月31日(日曜日)付朝刊 (22)

防潮堤に描く山田町

八戸市の八戸工大(坂本禎智学長)感性デザイン学部の学生らは、山田町織笠の国道45号沿いにある全長約250mの防潮堤で、壁画制作を行っている。東日本大震災の復興支援で町民と交流してきた縁で企画。将来は地元の子とも加えた壁画更新も視野に入れており、若い世代の震災伝承にもつなげる。

八戸工大

防潮堤は高さ約7m。学生が地元の建設業者から足場の提供を受け、8月から作業を開始した。週末中心にこれまで約30人の学生が参加し、250mのうち60m付近まで描き進めた。クシラなどの海の生き物や秋祭りのみこしなど、町を象徴する物事を生き生きと描いている。

同大硬式野球部はこれまで、復興支援の一環として町内の球場で大学野球リーグ公式戦を企画したり、小中学生向け野球教室を開くなどしながら町民と交流を深めてきた。昨年、学生側が防潮堤を管理する町に壁画制作を提案し、了承された。

卒業研究として壁画制作に取り組む同学部4年の大久保航也さん(22)「久慈市出身」は「町の人からも『防潮堤で海が見え

壁画制作、若者へ震災伝承



足場に乗り、国道沿いの防潮堤に壁画を描く八戸工大の学生ら

なくなつて寂しい」との声を聞く。被災経験のない学生とともに現地の実情を学びながら、カラフルな防潮堤に仕上げたい」と意気込む。

大人数による作業は今月で終了し、今後は少人数で仕上げしていく。具体的な完成目標は設定せず、劣化した部分は定期的に

地元住民と塗り直していく予定だ。

学生を指導する同学部の皆川俊平准教授(39)は「壁画を描いて終わりにせず、将来世代と制作を続けることで、若い人たちに防災の当事者意識を高めてもらいたい」と期待する。

(佐藤渉)

※この記事・写真等は、岩手日報社の承諾を得て転載しています